

梶山龍耳

【屋久島雜筆（下）】

山本秀雄

尾之間

オノアイダと読む。下屋久村役場の所在地だ。安房から約十五軒、バスで一時間半かかる。海岸ではあるが、台地の上にあつて港は無い。戸数百八十戸、人口九百、役場の外に郵便局、旅館二軒、雜貨商三、四軒の小部落だ。

役場から西へ十分位かかるところに尾之間温泉がある。今の処、共同浴槽が二つあるだけで、一つは村人達が使用し男女に区分され、今一つは来客用で上位に混泥土で稍良く仕上げてある。

湯は溪谷の山の根に湧き出て居る。明礬硫黄を含んでおり温度は四十五度ばかり、島としては免に角有名だ。旅館内湯で無いから、尾之間に泊つて手拭をさげて砂利多い道路を十分間ばかりテクテク歩いて行かねばならぬので不便だ。

ここは電源開発工事が始まつたら發展するだろうと期待されているが、やがて内湯のある旅館が出来るだろう。ボーリングしたら湯

ももつと出そうに思われる。

宮之浦

宮之浦は屋久島で一番大きな部落だ。島の東北海岸、宮之浦川の河口左岸に部落の中心がある。人口三千余、ここに熊本支庁出張所、上屋久営林署、上屋久村役場、郵便局などの外、宿屋が三軒、各種商店が十数軒ある。

宮之浦川は此の部落附近で幅百米ばかり、水深く、干潮面以下二米、船は此の河口に入るが四〜五十トン止り、定期船は入港出来ない。宮之浦橋は鉄筋コンクリート造で、部落の稍上位の処に架けられ、太平洋戦争で部落寄り二十米ばかりが落とされ、此の部分は仮橋となり、朽ちて不便であつたが、今は元通り補修されて屋久島周回道路の一役を果して居る。

対岸も宮之浦に含まれ、川添いに小学校があり、その海岸寄りには広い雑木林があり、中に高い老松が並立し、外は屋久島としては珍らしい砂浜となり、鹿兒島・種子ヶ島からの海底電線もここに上陸して居り、此の浜と

老松とは宮之浦の風致を良いものにして居る。

又、宮之浦部落の北側海岸寄りには益救神社が雑木林に包まれて居る。この益救神社は今から千二百年前に創設せられ、明治四年、廢藩置縣のときに縣社となつたもので、天津日高彦火出見尊を祀つてある。更に益救神社から北寄海岸は砂浜、松並木があり、その先に岬が突き出て居り、此の岬の陰に営林署の貯木場が設けられ一寸した岸壁が出来て居る。定期船は此の岸壁の前面に碇泊する。森林軌道は此の貯木場から宮之浦部落の背後を通り、宮之浦川筋伝い上流に十余キロ延びて奥から原木が貯木場に搬出され、ここから船で鹿兒島港へ輸送されて居る。

部落の前面、海岸通りは、低い護岸石垣が出来て全面的に船着場となり、満潮のときはヒタヒタと潮が寄せて何となく賑かである。

永迫旅館は此の海岸道路に添つた高さ一米位の石堀の中にあり、道を隔てて川に面し、庭は老松が二、三本生え低いつつじなど添えて簡素に造られ、アッサリして良い。朝早く起きて縁側に座ると対岸の松林も望見され落ちついた気持になる。その中に鯖の漁船がボ

ツボツ帰って来て江岸につく。部落の人達がとりたての鯖を買出しに来て、一としきり賑ふ。旅館でもこのとりたての鯖を朝から食膳にのせる。先づ刺身、ブツタ切にした煮物など、朝から魚ばかりどうかと思われるが、新鮮なところが良い。

宮之浦橋の夕涼みも悪くない。蚊は居らず川風が涼しく、海岸の方を眺むれば河口を挟んで左に部落の灯、右に老松の林、上流側も川幅広く可成り奥迄入りこみ、その奥は見上ぐる様に高い眞黒い山々が迫って居る。月の夜など格別だ。もしそれ此の川に「流れ舟」を一夕催したら興趣満点だ。

## ぼんかん

屋久島のぼんかんは確かに美味しい。暖地のもの程甘ったるいらしい。台湾物より少し酸味があるけれどもそれがよい。垂水のぼんかんは酸が強過ぎる。県外に出荷するときは垂水産、種子ヶ島産、屋久島産、共に鹿児島ポンカンとレッテルがつけられるが、私の舌では垂水物と屋久島物とはすぐ判る。柑橘類中、味の王者であろう。

屋久島の産地は平内が中心だ。これは今から数十年前、台湾で学校教師をしていた黒葛原兼成と言う人が帰って苗をとり寄せて、自分でポンカン栽培を始めると同時に村人にも

大いに之を奨励して植えたのが、今日下屋久村ポンカンが有名になった原因だと言う。

前から内地に出して居たが、近頃、県の宣伝などで一層有名になったと言う。今は前記の如く鹿児島ポンカンのレッテルで一級品、二級品と言つて出荷されるが、従来左の規格があつた。

天（外径二寸五分以上）

徳（外径二寸二分以上二寸五分以下）

鹿（外径一寸九分以上二寸二分以下）

兎（外径一寸六分以上一寸九分以下）

島（外径一寸六分下）

右の寸法は環があつてそれを通して検査する。一級品として天、徳、二級品として鹿、三級品はそれ以下で、地元の店先で売つて居るのはこの三級品だ。これでも温州や桜島みかんなど逆立ちしても追つかない。

値段も近頃上つた。一級品が百匁二十円であつたが、今年は四十円、五十円と言ふた。地元として少し高過ぎる。

## 黒砂糖

終戦直後、糖分を断たれた国民は砂糖に対する憧れは熾烈なものであつた。必然に種子ヶ島、屋久島の黒糖が注目せられた。生産高から言えば当時五百万斤にも満たない数字であつたけれども、黒糖の一斤は宝石の様な感

じがした。昭和二十三、四年頃の鹿児島黒糖騒ぎは今から考えると気狂いじみて居る。鹿児島から種子ヶ島へ行ふ定期船は黒糖の闇買いで船毎に溢るるばかり。種子ヶ島迄行って一斤百五十円から二百円位で百斤も買つて帰ると、鹿児島では忽ち百匁三百円に売れたのだから無理もない。資金さえあれば、またたく間に百万円、二百万円儲けるのは訳はなかつた。船に百円札を以て何俵も積んで行つたと言う話もあつた。

ところが、当時、農家は砂糖黍をうんと植えて儲けたかつたが、食糧の割り当て供出がやかましく、持畑の七、八割はどうしても主食を作付けねばならなかつたので、そう儲ける訳にも行かなかつた。もし一町歩も植える黒糖にして一万斤もとれて、斤二百円としたら年二百万円と言うことになり、農家としては豪勢な話であつた。

糖価は昭和二十四年の斤三百円を最高として下落し始め、翌年は斤百円を割り暴落して最近では斤四十円にもなつた。昭和二十九年春はいくらか持ち直したから良いだろう。然し黒糖斤四十円でもまだまだ他の普通農作物より金になるので、畑作は、供出の制限がとれた今日ドシドシ砂糖黍に替えられて居る。大體反当収量は、黒糖にして反八百斤乃至千二百斤、平均千斤と言うところだ。

我国の砂糖の問題は中々大きい。国全体と

しての消費量は大きっぱに年百万トン。これに対して国内産は北海道のビートによるもの年三万トン、種子・屋久のもの四千トン足らず、それに今度奄美大島が復帰したので大いに期待されるけれども、全生産量五万トンは六ヶしかろう。結局十万吨にも満たない数字だ。反当収量は、糖化して、ビートによるもの五百斤、種子・屋久千斤、奄美大島は千二百斤も採れようが、昔台湾で年百五十万トンも生産していた事を思ふと慄然たらざるを得ない。

ついでに今少し種子・屋久の黒糖生産について書く。

作付面積と生産高			
作付面積(約)	反当黒糖	黒糖生産高	
種子ヶ島	五〇〇町	一、〇〇〇斤	五、〇〇〇、〇〇〇斤
屋久島	五〇町	一、〇〇〇斤	五〇〇、〇〇〇斤
計	五五〇町	一、〇〇〇斤	五、五〇〇、〇〇〇斤

砂糖黍は毎年四、五月に植えて、一月から四月にかけて刈り取り、直ちに絞って黒糖にする。種子ヶ島の方が一と月早い。

黒糖の生産方法は、先づ砂糖黍運搬の関係から大体附近の栽培面積十町歩に一ヶ所の割合で製糖工場が設けられ、又各戸の作付面積は普通一反位が多く、中には一町近くも植え

る人もあるが稀だ。それで一製糖工場に数十戸の耕作者が居る訳で、これ等の耕作者は予め日割を決めて刈取搬入をする。刈取の日には田植などの如く親族一家寄り集って十数人でその家のものを片付ける。

工場の方は業者があつて請負が多く、千斤につき六十斤乃至八十斤の手間賃を貰ふが、薪は耕作者持ちで、黒糖千斤につき松薪三乃至五棚を必要とする。薪一棚は割木を積んで高さ五尺、長さ十尺、厚さ一尺六、七寸で、正味二・五石だから黒糖千斤(換言すれば反当)につき松約十石を必要とするから、種子屋久全体では毎年五万五千石をこれに投じて居ることになる。

工場は、先づ絞り機械が五乃至七・五馬力一台で、これは発動機、水車、モーターなどを使う。糖液槽一個、蒸発鍋三個一組のもの一組又は二組、硬化槽一個、従業員六、七名から成り立ち、これで一日約千斤を生産する。生産過程は畑地から荷車で砂糖黍を工場に搬入し(生産者)、以下工場で絞り、液は槽に入れ、次に三つ並んだ鍋の一つに入れて下から薪を焚いて煮つめて、漸次濃縮したものを第二、第三の鍋に移し、最後に硬化槽に移し、石灰を混じて練り上げ、之を夫々樽、箱等に入れ、数時間の自然冷却によりて全く硬化せしむる。此の製糖業者は一日平均七十斤位の収入があり、一期間を仮に百日とすれば、七

十斤の斤当四十円として二十八万円となり、これで人夫賃、動力料金、機械損料、其他一切を支払い、何程かの利益があるらしい。

ところで問題は年々五、六万石の松材を焚いて仕舞ふことだ。種子ヶ島など由々しい問題で、やがて目欲しい島の松林は伐り尽されて裸になるだろうと言はれて居る。更に黒糖も、今日に於ては更にもっと良い物に加工される必要も考えられて居るので、黒糖の将来について筆者は次の様な事が言い度い。

製糖工場はまとめて大きなものとして合理化するのが本統だけれども、種子・屋久では黍の集荷の関係上、矢張り十町歩か二十町歩程度で、トラックが入るところで絞る丈の設備をなし、絞り液をドラム缶か何かで製糖工場に運んで、ここで精糖を作つたらよくはないか。然らば絞るのは発動機かモーターかでやり、精製の場合は石炭か何かでまとめてやることにする。

或は又、台湾製糖などは砂糖黍の絞り殻がボイラーの燃料に使用されていたらしい。現在、種子・屋久の製糖工場でも之を燃料に転用することが出来たらよいかもしれない。今は各工場毎に絞り殻は山のように積まれ、始末に困って居る状態だ。うまく考えたら専売特許ものだ。

## 一 湊

一湊は屋久島の北端にあつて九州本土に一  
番近く、北向きの湾にのぞみ、古来漁業の根  
拠地となり、屋久島第一の港部落であつた。  
這般の大戦で徹底的に空襲破壊されたが、最  
近漸く復旧して今や人口三千余、宮之浦に次  
ぐ部落となつた。

部落は北向きではあるけれど、屋久島とし  
て一番良い自然の湾を持ち、鹿兒島からの定  
期航路として東廻りの十島丸、西廻りの長運  
丸が月に七、八回宛寄港する。惜しむらくは  
背後が山地で平地が少なく、大工場地には向  
かないし、又港は水が深過ぎて、防波堤が築  
き悪く、大築港が築き悪い。

然し何と言つても鹿兒島に一番近いこと、  
飛魚、鯖などの漁業が此の近海で盛んな事な  
どが此の港の底力となつて居る。

屋久島測候所、屋久島無電局などが置かれ  
て居る。

## 楠川

楠川は屋久島の東北海岸、宮之浦から四キ  
ロ南方にある漁村で、岬の陰に一寸した船溜  
が出来て居る。人口七、八百。屋久島として  
は比較的背後土地が広く、百町歩以上あるの

で終戦直前、海軍が屋久島の大電源開発を考  
えたとき、前面の海岸に大築港をなし、此の  
楠川背後平地を工場地帯となす計画であつた  
と言う。

当時、海軍で有名な長嶺大佐と言う人の構  
想で屋久島の全水力を四十万キロワットとお  
さえ、航空燃料の増産を目論むこととなり、  
総事業費は、当時の金で発電工事費七千五百  
万円、港湾設備費二千万円(楠川港)、工場建  
設費五千万円等、計一億五千万円の予定で新  
会社を作り、三井化学をして之に当らしむる  
こととして略軌道に乗らんとしていたが、終  
戦直前のこととて遂に実現するに至らなかつ  
た訳である。

終戦後も、楠川の前面に築港をなして此の  
海軍の構想を可とする向もあるが、県港湾課  
で港の調査をした結果、必ずしも好条件でも  
ない。

楠川は今飛魚の中心地である。

又、安房川流域小杉谷に宮之浦から登る場  
合、楠川から城の川流域を伝い、三本杉の峠  
を越え、イデワカシ川の左岸伝い愛子岳に近  
い分水嶺を越すと、安房から登るよりズツ  
近い。

## 永田

永田は屋久島の西北海岸にある割合大きな

部落で、人口二千二百ばかり、郵便局、駐在  
所、管林署林業事務所の外、旅館二軒、商店  
十軒ばかりある。一湊から西南十キロ余、永  
田川河口を挟んで部落が散在して居る。定期  
船は鹿兒島から一湊を過ぎ、永田に寄り、栗  
生、及び口之永良部島、一月五、六回航行し  
て居るし、又、一湊から道路もあつて自動車  
が通ふ。

永田は交通の關係から裏屋久島と言ふ感じ  
がするけれども、行つて見ると屋久島で一番  
落ちついて居る。水田も二、三十町歩あり、  
海岸は珍しく砂浜で、前に口之永良部島が見  
え、魚は獲れるし、よい処だ。昔は鱈の産地  
として有名だったが今は見られない。民有林  
が多く、杉の原木が近頃、多く伐り出されて  
居る。

部落の南に九電の岳之川水力発電所があり  
出力百五十キロワット、之で永田、吉田、一  
湊に千五百位の電灯を点じて居る。此の発電  
所はもと屋久島電気会社と言ふ小会社であつ  
たものを、昭和十五年頃、九州電力に合併統  
制されたものだ。

永田川橋に佇ちて山の方を眺むれば、永田  
川溪谷をすかして冠さる様に永田岳が望見さ  
れる。海岸から直接奥岳が見られるのは屋久  
島ではここだけである。

永田から西四キロ、屋久島の西端に永田灯  
台が眞白く望見される。

## 栗生

栗生は人口千八百、四百戸足らず。昔は鯉の産地としてよかつたが、今は沖に良い漁場はありながら魚は皆、山川、枕崎などに持つて行かれるので何にもならない。まあポンカシや黒糖などが少し出るだけ。近頃、小水力発電所を部落で造つたので明るくはなつた。

栗生川は、河口から二キロばかり海岸に並行に北方に入江となり、水面広く水深も干潮面下二米位はあるが、河口が詰つて大きな船は這入らない。二、三十トン止り。部落は此の河口の左岸に拡がつて、郵便局、学校、営林署林業事務所などがあり、宿屋一軒、商店四、五軒と言ふところ。先の大戦で部落の大半焼かれたが、最近、漸く復旧した。終戦直後は我国の最南端と言ふ事で密輸入の基地らしい事もあつたが、大した事でもなかつた。下屋久村の端れで安房から三十余キロ、バスが二回通ふし、長運丸も月に五、六回は寄港する。何しろ辺鄙なところと言ふ感が深い。何か然るべき産業を考ふべきだ。

下屋久営林署の林業事務所が部落の南端にあり、一寸とした岸壁も出来ており、これから森林軌道が部落の背後を通り、栗生川支流黒味川の流域に六、七キロ上つて居るが、今は一応段落がついて、余り盛んに伐採は行わ

れていない。

## 水力発電

屋久島の包蔵水力資源は、昭和二十四年、鹿児島県の調査書によれば、設備にして三十一万余キロワット、年発生電力量十九億キロワット時、これを現在の工事単価で見積つても僅々二百二十億円（キロワット当七万円）で開発し得ると言ふのであり、此の中、目下工事に着手されんとしている安房川第一期計画の五万キロワットの如きは僅々十九億円（キロワット当三万八千円）で出来ると言ふのである。

之を発生電力で考えると、建設費二百二十億円を十九億キロワット時で除して十一円五十八銭となり、これが年償還率を一割とすれば、キロワット時当り一円十五銭八厘に過ぎず、之に維持管理費を加算して一円五十銭程度で供給可能である。前記、第一期計画に至つては正に此の半値に過ぎない。以て豊富低廉質の電気であると言ふことが出来る。

直径二十五〜三十キロの離島に、何故に斯様な大電力が得られるのか一般に不思議に思われるが、その依つて来るところはある。

先づ雨が多い。一年に平均八千ミリ、多い年は一万ミリにも及ぶことがある。これは内地の各地が年千乃至二千ミリであるのに対し

五、六倍の数字である。加ふるに流域は森林であり、河川の流量が流域面積の割合に非常に多い。雨量と同じく五、六倍ある。

次は山が高く、九州第一の高峰宮之浦岳などを含み全島高山であつて、従つて河川勾配が急峻であるため、短い導水路で直ちに高落差が得られるからだ。

大体、水力電気は水量と落差との積に比例するのだから、二つの因子が皆大きいため、その出力は幾何級数的に増大する訳だ。又、導水路が短いから、従つて土木工事は僅小で済むことは明かだ。兔に角、斯様な訳で屋久島水力電気が豊富低廉と言ふ事が何人にも肯けると思ふ。

屋久島の水力資源が大きい事は遠い以前から考えられて居り、又、或程度、之が開発に力を尽された事もあつたけれども、之を上記の如く具体的に判つたのは、昭和二十四年、鹿児島県が曾ての朝鮮鴨緑江水豊ダムの建設者、久保田豊氏に委嘱して調査立案をして貰つてからであり、延いて久保田氏は此の大電源開発の使命を負はされた屋久島電気興業株式会社社長として、今日、種々画策をして居り、鹿児島県の為、將た又我国産業再建の為、此の会社の発展を祈るや切である。